

Lord of Knights ーサラの洗濯、ヨミの選択ー

霜山航太郎

ここは、レムリア大陸。冥王ディグラストが支配する、混沌と争いの渦巻く大きな大陸です。しかしそんな中、平和な世界を取り戻そうと立ち上がる勇者がいました。これは、その勇者アルフレッドとその仲間たちが、冥王軍の本拠地へ挑むその少し前のお話。

時刻は朝、川の近くで野宿をしていた勇者たち一行でしたが……。

ヨミ「おいサラ！ サラはどこにいるんだ！」

アルフレッド「ふわあ……なんだよ、朝から大声出して」

ヨミ「ああ、アルフレッド、なんだよじゃない、朝起きてみたら、私の笏がなんだか良い匂いがあるようになってしまったんだ！ しかも微妙に生乾きだぞ！」

アルフレッド「……それ、そんなに大騒ぎするようなことか？ 多分、サラがその棒を洗濯しておいてくれたんだと思うけど……」

ヨミ「それはわかる！ なんて急にそんなことをしたのかと聞いているんだ！ あとこれは棒じゃなくて笏しゃくだ！」

アルフレッド「なんでつて言われてもなあ……身近な衣服や道具を洗って綺麗にする。オレたち人間にとつては当たり前のことだ。……まあ、最近は忙しくて洗濯なんかできてなかったけど……」

ヨミ「キミの鎧もそこに干してあるが、いいのかわ？」

アルフレッド「おお、本当だ。昨晚の内に、サラが洗濯してくれたんじゃないか？ ありがたい、感謝すべきことだよ」

ヨミ「……いいや、悪い。冥界の獄姫であるこの私がわざわざキミたちと共に行動しているのは、勇者であるアルフレッド、キミの在り方に興味があるからだ。いくら英気を養うためとはいえ、今の鎧も着ていない、だらけた寝間着姿のキミに興味があるわけではない。第一、今ここで敵に襲われでもしたらどうする？ そのカジュアルなファッションで生き残れるとでも？」

アルフレッド「うっ……痛いところを突くなあ。でもその時はほら、ヨミが助けてくれるだろう？ 確かオレが死んだら、またつまらない業務に戻らなきゃいけないんだっけ？ 何にしても、オレはお前のこと、信じてるからさ」

ヨミ「むう……よくもまあ笑顔でそんなことが言えるものだ。気恥ずかしさとか抱かないのか、キミは！」

アルフレッド「ん？ なんだ、もしかして凶星か？」

ヨミ「あーあー、聞こえない。私は何も聞いていないぞー」

アルフレッドとヨミが話しているところへ、水の入ったバケツを持って歩いてくる少女がひと

り。

サラ「よいしょ、っと」

アルフレッド「ああ、おかえりサラ。洗濯、ありがとうな」

ヨミ「どういうことだサラ、私の笏を勝手に持ち出して、あまつさえこんな匂いまでするようにしてしまっただけだ！」

サラ「あつ、起きてたんだ。それね、この間魔獣と戦った街があつたでしょう？ その方々がお礼につけてくれた石鹸のおかげなんだ。いい機会だし、お洗濯しちゃうかなって。ほら、ヨミさんのその棒もいい匂いがするでしょ？」

ヨミ「これは棒じゃなくて笏だ！」

アルフレッド「どつちでもいいよそれは……」

ヨミ「とにかく！ これは大事なもんだ。文化だか習性だか知らないが、キミたちの勝手な営みに巻き込まないでくれ！ わかったかい！？」

サラ「は、はい……すみません」

ヨミ「まったく……」

そう言うと、ヨミはブツブツと悪態をつきながらどこかへ出かけて行ってしまいました。

アルフレッド「……はあ。これじゃあ、どつちが年上だかわからないな」

サラ「ご、ごめんなさい……私が勝手なことをしたせいで……」

アルフレッド「サラが気にすることなんかないよ。でも、いくら石鹸を貰ったからって、どうしてこんな時に洗濯なんかしたんだ？」

サラ「あ、それは……その、私も、何か役に立ちたくて。アルフレッドさんはいつも優しくして、私のことも、みんなのことも守ってくれて。ヨミさんは気難しい方だけど、いざというときはすっごく強くて頼りになるし、それで私は、って」

アルフレッド「サラ……」

サラ「私、故郷のお婆ちゃんに教わったんです。『洗濯して綺麗になった服を着ると、身も心もスッキリする。だから洗濯できる人間は、いつの時代も英雄なんだ』って。私が英雄だなんて思っただけで、それでも、少しでも力になれたらなって」

アルフレッド「ハハ、いい言葉だ。それはきつと正しいことだと思うよ。なんせ、オレにとつてはサラは偉大な英雄だからな」

サラ「そ、そうでしょうか……えへっ」

アルフレッド「ああ、きつとそう……」

サラ「……？ アルフレッドさん？」

アルフレッド「……サラ、静かに……！ さつきから木々の揺れる音が近づいてる……何かがおこつちに来てるぞ……！」

勇者アルフレッドが構えた次の瞬間、二メートル以上はあるかというそれは姿を現しました。

魔獣「グルルル……」

サラ「魔獣！？ いつの間……！」

アルフレッド「しまった……オレとしたことが……」

サラ「どうしましょう、アルフレッドさん……」

アルフレッド「サラはオレの後ろから離れないでくれ。丸腰だが、こうなったらどうにかして突破するしか……」

魔獣「グオオオッ！」

まさに絶体絶命、万事休す。魔獣がアルフレッドに襲いかかる……と、その時でした。

ヨミ「サラ！ アルフレッド！ 死にたくなければ伏せていろ！ ……闇よ、空を駆ける！ 『グ
リムパニツシャー』！」

魔獣「グギヤアアアッ！」

サラ「ヨミさん！」

木々の奥から姿を現したヨミの一撃で、魔獣は一目散に逃げ帰っていきます。

ヨミ「ふん、笏が生乾きなおかげで威力も半分だ」

アルフレッド「ヨミ、どうしてここが……？」

ヨミ「私の地獄耳を舐めるなよ、アルフレッド。私の名前を出して噂をしようものなら、たちどころに居場所くらい掴んでみせるさ。そしてサラ、私は別に気難しいわけじゃない、ただ気分屋なだけだ」

サラ「ヨミさん、もしかして、それを言うために……？」

ヨミ「そうだが、何か？」

サラ「……ヨミさん、私が思ってたよりもずっと可愛い人なんですネ。ふふっ」

ヨミ「んなっ、ど、どうしてそこで笑う！ あと、面と向かって褒めるのはやめろ！ 褒めるながらもつと私がいなくてここで褒めてくれ！」

×××

アルフレッド「よし、荷物は全部持ったな！」

サラ「はい、洗濯物もバッチリです！」

アルフレッド「よし、じゃあ行こうか！ ここから先は更に更に魔獣が多くなる。より注意して進まなきゃな。……それとヨミ、お前の力、頼りにしてるよ」

ヨミ「ふん、私が力を貸すのは気が向いたときだけだ。間違っても期待なんかしないように」

サラ「はい！ 私も、ヨミさんのことすごく頼りにしてます！ 改めて、よろしくお願いしますね！」

ヨミ「……キミ、絶対私の話聞いてないだろ……」

こうして、互いの絆を深めあつた勇者アルフレッドとその仲間たちは、今日も旅を続けるのでした。

ヨミ(……しかし、これは予想外だな。私が興味を抱いていたのは勇者アルフレッドの人間としての在り方だが、その形成に関わる文化や他の人間との交流、そして成長させるサラというも

う一人の人間の存在も興味深い……それにこの私が、無意識的にアルフレッドだけでなくサラまで助けるという道を選ぶとは……これではまるで、私自身が人間に影響されているかのよう。……いや、まさかな)

アルフレッド「でも、まさかヨミの杖にそんな効果があったなんてなあ」

サラ「確かに。生乾きで威力が半分なら、ウエルダンで威力が二倍になったり……?」

ヨミ「ああ、よく焼いた方が威力が大き……ってそんなわけあるか！ あとこれは杖ではなく笊だ！ 笊だからな！」

『Lord of Knights』サラの洗濯、ヨミの選択。』終

※当作品は「Lord of Knights」短編小説募集企画に応募いただき『佳作』を受賞した作品です。